

巻 頭 言

心理学の研究領域が近年著しく拡大し、心理学を専攻する者が増えたことはよく指摘されることである。狭い意味での実験心理学が中心であった時期と比べると研究対象はきわめて多くなりつつある。都市の問題について心理学者が関与するようになってからの歴史はまだ浅いが、どんな問題が心理学の立場から研究課題となるであろうか。

都市には刺激も多く、就学や就労の機会も多いので人が集まる傾向がある。わが国の場合、いわゆる高度成長の時期ほどではないにしても毎年多数の人、とくに若い人が地方から都市に集まってくる。このなかのあるものはそのまま都市に定住し、あるものは幾年かのちに再び出身地に帰っていく。Uターン現象といわれることである。農山村に比べて都市では人の移動が多いのである。このことは電話の名義変更が年間どのくらいあるかを比較してみても明らかになる。

地方で生れた青年は都市あるいは都市の生活にあるイメージをもっている。期待に溢れていることもあれば不安を抱いていることもある。この都市についてのイメージがどうしてつくられたのか、またはそれは都市で生活を始めるとどのように変っていくのか、ひとつの興味ある問題である。同じ時期に同じ地方から都市にきて定住するものとしめないものがある。また転々と職を変えるものもあれば、ひとつのことに打ち込んでいるものもいる。これらの違いは決して単純ではないが、個人差の解明は心理学者の関心をひくところである。

都市住民は相互によく知らない。匿名性が顕著であり、これが犯罪の多発、人情の稀薄さと結びつけて考えられる。地域社会の成立も地方の小都市や農山村に比べて容易ではない。地価の高騰や生活上の便利さから都市に高層集合住宅が増加したことも戦後の大きな特色である。この種の住宅の住民は、どのくらいの居住空間と設備があると快適と感ずるのか、建物に「収容されている」と思うか、「住んでいる」と感ずるかの差異は何によるのか、これもひとつの問題である。ダイニングキッチンといわれるものが、どのような事情でつくられ、その機能や意味がどう変わったかも研究に値する問題である。家屋の構造の変化が夫と妻の人間関係や役割分担を変えたとも考えられる。

都市には相対的にみて若い夫婦が多い。当然、子どもの教育、子どもの生活環境が問題となる。どんな遊び場が子どもに好まれ、また必要かということも心理学が関与する問題である。老人が都市で快適に暮すための条件は何かという問題もある。大都市には犯罪が多いとよくいわれるが、世界の大都市に比べて東京の犯罪率は低く、活気に溢れている。これはなぜか。警察がしっかりしているだけのことでないような気がする。都市にはドロップアウトした人が多いのも事実である。どんな経過でこのようになったのか、それに個人の性格的要因がどう関連しているのか、これも心理学のひとつの問題といえよう。防災の問題、公害の問題も重要である。

都市そのものも都市における人間の生活も今後さらに多様な変化を重ねていくであろう。都市が人間によってつくられ、そこに人間がいる以上、心理学はどんな研究が可能で、どんな貢献ができるかをつねに考えていかななくてはならない。研究の方向はいろいろあろうが心理学が単独で解明できるテーマは少なく、学際的研究がますます必要になることは間違いないことである。